

日本の在来犬 縄文柴犬の歴史

〔はじめに〕

イヌは人に飼われるようになって、大小や性質、その他様々な特長を持つようになり、現在では、500種とも言われる程にいろいろな種類が増えました。

これは、大昔から人為選抜しながら育てた結果として、多様化したと言えます。しかし、犬は大昔から余り変わらない姿や性質も沢山持っています。

私たちが日常親しんでいるイヌの動物分

類学上の位置は、哺乳類の食肉目・イヌ亜科・イヌ属にあって、学名を **Canis Familiaris** と、スウェーデンの学者リンネにより命名されました。

イヌは人類最古の家畜で、人の住むところに必ずその姿があったと考えられ、その起源や進化についてはまだ研究途上にあります。

David Alderton, DOGS. First published in Canada in 1993 by Stoddart Publishing Co., Ltd.



1. イヌの歴史 ——— 日本犬のルーツ

(起源は・・・)

古生物学者のヘッケル (E. H. Heackel) によれば、今から約5,000万年前の始新世(しんせい)に出現したミアキス上科の動物から進化した哺乳類・ブルパブスと言う肉食性の動物が居て、この動物からイヌ科・ネコ科・イタチ科などが進化したと言われています。

このブルパブスからは漸進世(ぜんしんせい)初期の3,500万年前になるとヘスペロキオンと言う最古のイヌ科動物が北アメリカに出現しました。

このヘスペロキオンは、ネコほどの大きさで胴と尾が長く肢(あし)が短く前後の指は5本ずつ、歯はイヌと同じ42本あり、頭蓋の中はやや広く、吻はそれほど長くなかつ

た様です。このヘスペロキオンの胴体が長かったと言う事は、弾力的な動きであったことを想像させます。



ヘスペロキオン：「イヌ(教育社)」より部分拝借した

漸進世の終わり頃約2,500万年前には、テムノキオンが現れました。キツネぐらいの

大きさを裂肉歯(れつにくし)が鋭かったといえます。

次いで、2,000万年前・中新世(ちゅうしんせい)にはイヌ亜科を意味するキノデスムスが登場、これこそがイヌ類の祖先だったようです。親指が小さくなり地面には着かなくなった状態となり、その点で亜科とされています。

1,200~900万年前の鮮新世(せんしんせい)前期、当時ベーリング陸橋からアジアに移住を開始したのがオオミミギツネ・タヌキであり、当時の北アメリカにはヤブイヌ群が栄えたと言われています。このヤブイヌ群は、イヌの先祖に近い仲間で、色が濃く乳首が6~8個あり、吻は短く、目は低い位置にあったようです。

鮮新世中期800万年前になると、ヤブイヌ群から進化したキツネ群とクルペオ群が現れます。この中でアカギツネの先祖もアジアに移動したと言います。このクルペオ群はキツネとイヌの中間のもので、ジャッカルに似ています。このキツネ群は吻が細長く尖り、尾が長く太く、ネズミを捕らえるのに適していました。

鮮新世後期600万年前になって、やっとお目当てのイヌ群が北アメリカに現れたようです。

コヨテとアメリカアカオオカミはそのままどまり、ジャッカルはアジアに移動し、ドール、リカオン、タイリクオオカミなどに

進化しました。

クルペオ群は南アメリカへ移動し、カニクイヌ、ヤブイヌ、コミミイヌ、タテガミオオカミ、スジオイヌ、パンパスギツネ、フオークランドオオカミへと進化しました。

350万年前には、二足歩行のヒト科動物アウストラロピテクス・アファレンシスが生息していたと考えられています。

更新世(こうしんせい)前期約300万年前にはキツネ群とイヌ群の一部(ジャッカル類とリカオン)がユーラシアからアフリカへ移動しました。

そして更新世(こうしんせい)後期約10万年前頃、タイリクオオカミ、アカギツネ、ホッキョクギツネがアジアを通過して北アメリカへ移動しました。

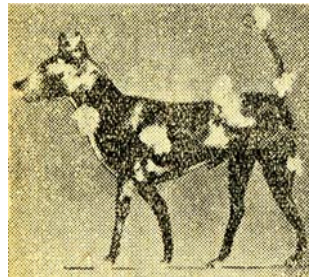
哺乳類としてのイヌ科動物は、進化しながら大陸から他の大陸により良い生活環境を求めて移動する、というような歴史があったと言えるでしょう。

この事は、例えば南米のウルグワイに住むインディオの先祖が、実はモンゴル系であって今から3万年前の大氷河期にベーリング陸橋を渡って移動した民族であったと言われています。人類学の分野がだんだん明らかになり、それと同時に人もイヌも、進化や移動の歴史を遡ると、辿り着くのはより良い環境を求め適応した動物だったとも言えそうです。

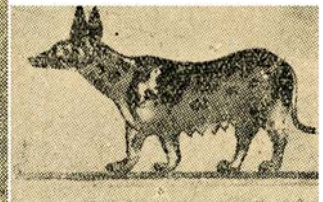
(家畜化のはじまり)

現在では、ドイツのオーバーカッセル洞窟で発見された14,000年前のものとして下顎骨が最も古いと言います。

北イスラエル、ヨルダン渓谷の上流では12,000年前に、老女の遺骨と一緒に埋葬されていた仔犬の骨格が発見されています。その後同じイスラエルの別なところからも、成熟した2頭のイヌが発見されています。最初の、犬の家畜化で有力なのは、「ヨーロッパやアメリカではなく、東アジアではないか(石黒・岐阜大)」と言われています。



エジプトの壁画



1934. 2「犬の系統史」より

(イヌについての研究)

イヌの祖先について、これまでは、イヌの性格や行動がジャッカルに似ていることからローレンツ博士が主張した説があり、これはその後否定された話として有名です。

二つ目は、もともと野生犬であったが、今は絶滅したとする説、三番目はオオカミ説です。

最近では、オオカミ説が最も有力でしたが、二番目の説つまり野生犬説も浮上しています。

野生犬の原型とするのは、オーストラリアのディンゴとかパリア犬(インドから地中海沿岸にかけて分布)だと主張されています。

私達が、犬の祖先がオオカミだとする理由の中には、地理的にも沢山の亜種に別れると言う条件がありました。情報の伝達能力に大変優れたオオカミには、人間と同じような社会組織や行動範囲があり、お互い同じ様な狩猟をした点も無視出来ないのです。オオカミは、最も人間と共存する機会に恵まれていたのです。

更に、イヌとオオカミとを交配し改良した例、その他「頭骨」など犬とオオカミの共通点があるのも有力な理由です。

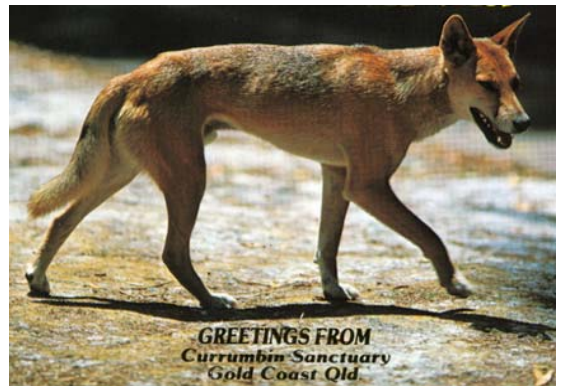
オオカミと犬を区分する、最近の研究・ミトコンドリアDNAの塩基配列の分析によると、明確なものがないという結果があります。塩基配列には様々な種や品種が入り交じっているという訳です。

私達はそうした意味から、イヌの祖先として最も有力なのはインドオオカミやアラビアオオカミではないだろうか?とも想像していますが、これはまだ明らかになっていません。

ここまでの研究によると、生物学的には、オオカミと犬を別種とするのは難しい事になります。



インドオオカミ



ディンゴ



最近の縄文柴犬

2. 在来犬の起源

日本犬の歴史については、横須賀の夏島貝塚から発掘された骨が今のところ最も古く、約1万年前のものが出土していると言われています。(標本は不明)

また、死後きちんと埋葬されていた例では、愛媛県の「上黒岩」岩陰遺跡から約9,000年前のものが発掘されていました。現在までイヌが発掘された遺跡数は661(茂原)が知られています。

この縄文時代のイヌの特徴は、先ず、額段(ストップとも言う)が浅い事です。そして、体高(犬が静止した時、地面から肩甲骨上端までの高さ)も30~(41)45cmまでが殆ど(金子)でした。頭蓋骨最大長の平均は、オス169mm、メス157mm(茂原)となり、非常に小さなイヌと分析しています。(注1)

この、額段が浅いと言う点を戦前の早い時期から指摘していたのは、日本犬の保存



運動への貢献やその研究で知られた斎藤弘氏や、アジアのオオカミや縄文時代のイヌの発掘などに携わった人類学の長谷部言人博士たちでした。

実際には、もっと古くから日本犬は存在していたと思われます。その理由としては、例えば沖縄で発見された古モンゴロイドであった港川人は、12,000年前の人であった点などが挙げられているからです。

3. 在来犬の研究と保存について

昭和になって、日本犬の見方に関する考え方には軍部も参加する事となり、国粹主義を否定する訳には行かなくなります。また、特殊なブームや状況にあっては、十分に研究者たちの意見が反映されないままとは言え、重要な「日本犬標準」の基礎がまとめられることになりました。

そして、現在は日本犬種団体が持つ、それぞれの「標準」・「基準」を基本にして血統書を発行していると思われます。(順不同)

- 1) 日本犬保存会
- 2) 秋田犬保存会
- 3) 秋田犬協会
- 4) 北海道犬保存会
- 5) 北海道犬協会
- 6) 北海道犬登録協会
- 7) 紀州犬保存会
- 8) 甲斐犬愛護会
- 9) 甲斐犬小型保存会
- 10) 柴犬保存会
- 11) 縄文柴犬研究センター

などです。この他にグループなどあるようですが、詳しい事はわかりません。



忠犬之碑
1933年頃



1933年頃-柴犬の販売広告

4. 縄文柴犬と縄文柴犬研究センター(JSRC)について

以上は、現在までに研究されていることの一部分です。日本犬については様々な角度からの課題が、益々増えております。

イヌの歴史は前述の如く、大古から人のかかわりのなかで滔々と流れ受け継がれていた、と言う点では異論のないものではないかと思われます。

天然記念物 柴犬は、わが国の固有の犬として1936年天然記念物に指定されています。

しかし、“額段が深くずんぐりした体型の柴犬”が何十万頭もいると言う現状の中

で、額段が浅く、体型がすっきりした、一見して俊敏で鋭さと野性味を感じさせる犬が、縄文柴犬研究センターの柴犬です。

以上の観点から、日本の在来犬としてその資質や形態を選抜し、1984年以降から”甦った縄文犬”という考え方で、その形質に共通性を持った、より確かな縄文時代の犬として来ま

した。これを、私達は研究と保存目的の観点から「縄文柴犬」と言います。(注2)

交流会での一コマですが、体型の違いが明瞭です。



(縄文柴犬の特徴について)

浅い額段、広く平らな額、太く締まった口吻、大きく鋭い歯牙、鋭く輝いた深い三角の目、耳は内耳線が直で外耳線は軽く曲線になり強く前傾しています。

均整のとれた体軀構成は筋肉質で軽快・俊敏な動作を示し、二重被毛と明るい裏白の毛質力強い尾など、全体の雰囲気には野性的な鋭さや感覚、犬独自の飼い主との深い信頼関係などがあります。

狩猟文化が数千年も続いた縄文時代に、番犬として、或いはヒトと共に働いた狩猟犬として集団で行動し“ヒトと深く関わり共存していた”わが国独自の日本犬柴犬の性質が形成されたと考えられます。従って、



←現在の縄文柴犬

昭和初期の北海道犬⇒



日本在来犬である縄文柴犬は、歴史的に大幅な品種改良を受けることなく、人為的な選別を薦めた結果として今日に至っています。

縄文柴犬は・・・

(1) わが国で最初の家畜として、家族の一員のように暮らしていました。

(2) たくさん居る犬のなかでも縄文時代の姿・形を残しているのは、この柴犬だけとなりました。

縄文柴犬研究センターでは、この「縄文柴犬」を輝かしい日本の文化遺産として、研究し保存する活動に一人でも多くの参加を希望し、真摯に語り合える事を願うものです。

(文責・五味 2009. 08. 10)

(注1)

犬の体型分類は、長谷部(1952)の5型分類による。頭蓋最大長から小級、中小級、中級、中大級、大級という大きさに分類した。ここでは、小型犬とか中型犬、大型犬の区別を意味しないので注意する必要がある。

(注2)

科学技術研究の発達に伴って、縄文期の遺跡から発掘された犬の頭骨と、“共通性がある”ことから、「まさに、縄文時代の犬を眼の当たりに見る…」(金子・1984. 8、考古学シリーズ10)との思いを以って、以降、私達は縄文柴犬と呼ぶ。

現在の縄文柴犬(♂)



昭和初期、栃木県鬼怒川の犬



〔参考にした文献〕

- ★内田 亨、1948. 2「犬-その歴史と心理」(創元社)
- ★斎藤弘吉、1964. 8. 1「日本の犬と狼」(雪華社)
- ★直良信夫、1965. 10「日本産狼の研究」(校倉書房)
- ★K・ローレンツ、訳者:小原秀雄、1966. 7. 15「人 イヌにあう」(至誠堂)
- ★直良信夫、1973. 11「古代遺跡発掘の家畜遺体」(校倉書房)
- ★ファーレイ・モウツ、訳者:小原秀雄・根津真幸、1977. 7. 29「オオカミよなげくな」(紀伊國屋)
- ★E. ツーマン、訳者:白石哲、解説:小原秀雄、1977. 12. 5「オオカミとイヌ」(思索社)
- ★社団法人日本犬保存会、1978. 12. 20「社団法人 日本犬保存会創立50周年史」
- ★平岩米吉、1981. 7「狼-その生態と歴史」動物文学会(池田書店)
- ★内田、平岩、金子ほか、1982. 1「動物と自然」(ニューサイエンス社)No.1
- ★今泉吉典ほか、1983. 12「このふしぎな動物・イヌ」(教育社)
- ★バリ・ホルスタ・ロバ、訳者:中村妙子・岩原明子、1984. 2. 25「オオカミと人間」(草思社)
- ★金子浩昌、1984. 8. 1「考古学シリーズ-貝塚の獣骨の知識」(東京美術)
- ★金子ほか、1987. 3「アニマ」(平凡社)
- ★茂原信生、1987. 12. 15「ヒトの咀嚼器官の未来を示すもの」(歯界展望70-6)
- ★埴原和郎編、1988. 3. 20「日本人はどこからきたのか」(小学館)
- ★江坂、金子、田名部、茂原、1989. 4「考古学ジャーナル」(ニューサイエンス社)No303
- ★田名部雄一、1989. 9「科学朝日」(朝日新聞)
- ★J. C. マクロリン、訳者:澤崎坦1991. 2. 15「イヌ」(岩波)
- ★田名部雄一ほか、1991「動物育種・遺伝学雑誌」(ハンブルグ・ベルリン)109巻・1991年
- ★江坂、1994. 1「考古学ジャーナル」(ニューサイエンス社)No.370
- ★ジェームス・サーベル、監修:森裕司、訳者:武部正美、1999. 9. 30「犬」(チクサン出版)
- ★小宮、茂原、石黒、菅原、加藤、2003. 5「考古学ジャーナル」(ニューサイエンス社)No.501
- ★長谷川、茂原、石黒、他、2007. 3「生物科学」日本生物科学協会(農文協)
- ★田名部、茂原、村山、石黒、2007. 7. 1「生物の科学-遺伝」(株式会社エヌ・ティー・エス)
- ★茂原信生、2009. 5「石器時代日本犬・長谷部言人(解説)」動物考古学、(動物考古学研究会)